



注) このリリースは、米国 Medtronic, Inc.が現地時間 2014 年 12 月 8 日に発表したプレスリリースを日本の報道機関向けに翻訳したものです。英文プレスリリースは、[こちら](#)をご参照ください。なお、本資料の正式言語は英語であり、その内容・解釈については英文リリースが優先します。

報道関係各位

2014 年 12 月 9 日

2014 年度 Bakken Invitation

与えられた命と時間を活かして社会に貢献した 10 名の受賞者を発表

Medtronic Philanthropy プログラム、世界中から選出された受賞者に対し
慈善活動への助成金を授与

Medtronic, Inc. (本社：米国ミネソタ州ミネアポリス、会長兼最高経営責任者：オマー イシュラック) は本日、世界中から選出された Bakken Invitation Award (バックケン インビテーション アワード) の受賞者 10 名を発表しました。同賞は、医療技術により健康上の課題を克服、世界各地において地域社会に貢献している人々を表彰し、つながりを深めることを目的として 2013 年に創設されました。

Bakken Invitation Award は、サービス・ボランティア活動・リーダーシップの各分野における優れた貢献活動に対して贈られるものです。毎年、10 名の受賞者が選出され、受賞者自身が選んだ慈善活動に対し Medtronic Philanthropy より 2 万ドルの助成金が贈られます。また 2015 年に受賞者はハワイで行われる祝賀会に参加、メドトロニック社の共同設立者でこのプログラムの発案者でもあるアール・バックケンに面会いただきます。

本年受賞された方々は、性目的の人身売買撲滅運動、脊柱側弯症検診の普及、インドの貧しい子どもたちが十分な睡眠を取るための支援など、さまざまな形で世界中の地域社会に貢献しています。

「患者さんによる社会への恩返しのお話を聞く度に、私たち一人ひとりには、世界に影響を与える潜在的な力が、多かれ少なかれ備わっていることに気付かされます。命に関わる健康上の課題に直面した際、この受賞者の方々は与えられた時間を活かして何か人々の役に立つことをしたいと考え、実行されたのです」とアール・バックケンは述べています。

バックケン自身も、ペースメーカー、冠動脈ステント、インスリンポンプにより、与えられた

命と時間を地域貢献活動に深く関わることで還元してきた患者の一人でもあります。

以下、本年度受賞者 10 名をご紹介します。また、世界中のさらに多くの与えられた命と時間を活かして貢献している人々の話を [Bakken Community](#) のサイトにてご覧ください。このサイトは、医療機器を使用されている方の誰もが、ご自身の状況と似た健康状態、居住地域、慈善活動への高い関心といった共通点をもつ世界中の人々をつながりを深められる仕組みとなっています。また本サイトへエピソードが投稿されるたびに、Medtronic Philanthropy より Project HOPE（世界の恵まれない人々に健康を）へ 10 ドルの寄付が行われ、医療サービスの行き届かない世界中の地域に医療技術を届ける一助となっています。

本年度受賞者の詳細や彼らが人生で学んだことについて、下記サイトにてご覧いただくことができます。 www.LiveOnGiveOn.org （英語サイト）

■2014 年度受賞者：

David Watkins（43 歳）、（米国・ワシントン州スノホミッシュ）

「いつ死んだとしても悔いのない生き方を始めよう」

子ども時代から成人にさしかかる頃まで、David Watkins は、診断未確定の大動脈二尖弁を抱えて生きてきました。診断を受けた頃には、動脈瘤のリスクが生じており、心臓弁交換手術を受けるかどうかの、難しい決断をしなければなりません。手術室に向かう途中で浮かんださまざまな想いの中で最後に覚えているのは、「僕の生涯はどのように人の記憶に残るのだろうか？」ということでした。回復後、彼は自分の死後も人の記憶に残るような生き方をしようと決意しました。現在、彼は「IronHeart Foundation」を通じて、スポーツの力を借りて人々が夢をかなえるための手助けを行っています。

Samantha Petersen（17 歳）、（米国・コネチカット州サウスウィンザー）

「困難も受け入れよう」

11 歳で脊柱側弯症と診断された瞬間、水泳選手としてオリンピックに出場するという若い Samantha Petersen の夢は唐突に断ち切られました。13 歳の時には、もはや泳ぐことはできず、数分立っていることさえ極めて困難になっていました。しかし、2012 年に受けた脊椎固定手術のおかげで、彼女の脊椎弯曲は矯正されました。当時 15 歳だった彼女は、脊髄障害を抱えるすべての人々に検診およびサポートを提供する「SHIFT Scoliosis」という組織を設立、その情熱と新たに手に入れた身体の自由をささげています。

Rajnikant Reshamwala (77 歳)、(インド・ムンバイ)

「『私にできることは何だろうか?』と自問したら、あとは実行あるのみ」

生涯にわたってボランティア活動に関わっている Rajnikant Reshamwala は、ムンバイの貧しい子どもたちを救う活動に熱心に取り組んでいました。しかし、冠動脈閉塞のため身体を動かすことが極めて困難となり、地域活動を続けることが難しくなりました。2013 年 1 月、彼は閉塞を取り除くため冠動脈ステント手術を受けました。元気を取り戻した彼は、貧しい子どもたちが夜間に十分な睡眠を取れるよう支援活動を行う国際組織「Sleeping Children Around The World」への協力に再び情熱を注いでいます。

Gretchen Merritt (35 歳)、(米国・ミネソタ州ホプキンス)

「憤りを感じることもあるなら、それを変える努力をしよう」

Gretchen Merritt は、人生の大半を 1 型糖尿病とともに生きてきました。彼女にとって、糖尿病は目標の達成を妨げるものではなく、むしろ自分自身の健康について、そして自らの情熱を何にむけるべきなのかについて慎重に考えさせてくれるものです。22 歳で使い始めたインスリンポンプは、QOL を改善してくれたと彼女は言います。現在、彼女は「Freedom Firm」を通じて、インドの性的奴隷解放運動に情熱を傾けています。

Joan Talkowsky (65 歳)、(イスラエル・テルアビブ)

「身近な世界から一歩踏み出してみよう」

Joan Talkowsky は、小さな個人レベルでの周囲との交流が力をもつことを知っています。彼女が長期ボランティアとして病院で赤ちゃんをあやしていた間に、医師が彼女の第 2 度房室ブロックの兆候に気づき、ペースメーカーを植込むことができました。現在、彼女は亡命希望者や外国人労働者などイスラエルで市民権をもたない人々のために、「Physicians for Human Rights」やその他団体を通じて活動しています。

Lucilla Bossi (64 歳)、(イタリア・ミラノ)

「1 日を忙しく過ごせる幸せに感謝」

Lucilla Bossi にとって、パーキンソン病とともに生きてきたこの 30 年近くは、日常生活で他人の余計な注意を引くことなく動く方法を身につけようと悪戦苦闘する日々でした。2001 年に脳深部刺激療法を受けて以来、彼女はイタリア国内におけるパーキンソン病患者さんの QOL 改善活動に力を注いでいます。

Clint Benson Doyle (27 歳)、(米国・ハワイ州カイルアコナ)

「創造性を癒しの力に」

突然の心停止が生じた幼い頃から、Clint Doyle は脳障害を抱えていました。医師は両親に、生き続けることはできないかもしれない、と告げましたが、彼は生き延びており、子どもたちが自分の夢を一つ一つ着実に思い描き、それを実現させる手助けをしています。現在、Clint は、植込み型除細動器を植込んでいます。彼は、障害を抱える子どもたちを対象とした美術教室を開催し、目標を見失うことなく挑戦し続けるよう、今日も子どもたちを励ましています。

Krystal Boyea (27 歳)、(バルバドス・ブリッジタウン)

「自身の体験を知ってもらうことで人生が変わる」

糖尿病が社会から白い目でみられ、患者さんが病気を表に出せないとき、糖尿病患者さんを取り巻く状況は一層ひどいものになってしまうでしょう。Krystal Boyea は「自身がどのように健康的に過ごしているか、糖尿病を抱えながらどう充実した人生にしているか、そして、周囲をどう勇気づけてきたか」ということを共有することに、彼女の青春時代を費やしてきました。国連と TEDx にて話をした彼女にとって初めてのオンラインキャンペーン以来、彼女はバルバドスやカリブ海域の糖尿病患者さんのリーダーとなりました。また、彼女はバルバドスに画期的な糖尿病診療所を共同で設立しました。糖尿病啓発運動を行う青少年のリーダーになった彼女の最初のプロジェクトは、自分自身と糖尿病にかかりながらも健全な生活を送っている他の人々の様子を描いた巨大ポスターを製作することでした。診療所を共同設立して以来、Krystal は、他の糖尿病患者さんの声をも代弁する存在となっています。

Igor Chamilla (59 歳)、(スロバキア・スリアチ)

「教えることで自分も学べる」

心停止、バイパス手術、ペースメーカー植込みを経験した後、Igor Chamilla は自分の病気について、そしてその病気を抱えたままいかに充実した生活を送るかについて、できる限りのすべて学ぼうと決心しました。しかし、彼はそれだけでは満足しませんでした。現在、彼は自身の財団で心疾患治療に特化している「Kardioklub SK」を介して、スロバキア国内で年間約 2,000~3,600 人の心臓病患者さんに教育コースを提供しています。

佐藤 治子 (Haruko Sato) (56 歳)、(日本・東京)

「置かれた場所で咲く」

2012 年、佐藤治子さんは頸部ジストニアを治療するため、脳深部刺激療法手術を受けました。頸部ジストニアとは、首の筋肉が不随意に収縮し、首がねじれたり、片側に傾いたりする痛みを伴う病気です。彼女は現在、日本国内におけるジストニア患者さんだけでなく、他のハンディキャップを抱える方々をも支援するため、日々たゆまぬ努力を続けています。

【Medtronic Philanthropy について】

Medtronic Philanthropy は、慢性疾患に対する高品質なケアへのアクセスを医療サービスの行き届かない世界中の地域に拡大すること、およびメドトロニック社員が暮らし、貢献活動を行っている地域社会で健康に関する取り組みを支援すること、に重点的を置いて活動しています。

【メドトロニック社について】

メドトロニック社 (www.medtronic.com) は、米国ミネアポリスに本社を置くメディカルテクノロジーにおけるグローバルリーダーです。世界数百万の人々の痛みをやわらげ、健康を回復し、生命を延ばすことに貢献しています。

なお、将来の業績見通しに関わるすべての記述は、メドトロニックが米国証券取引委員会に提出する定期報告書に記載されているようなリスクや不確定要素の影響を受ける場合があります。実際の業績は予想と著しく異なる可能性があります。